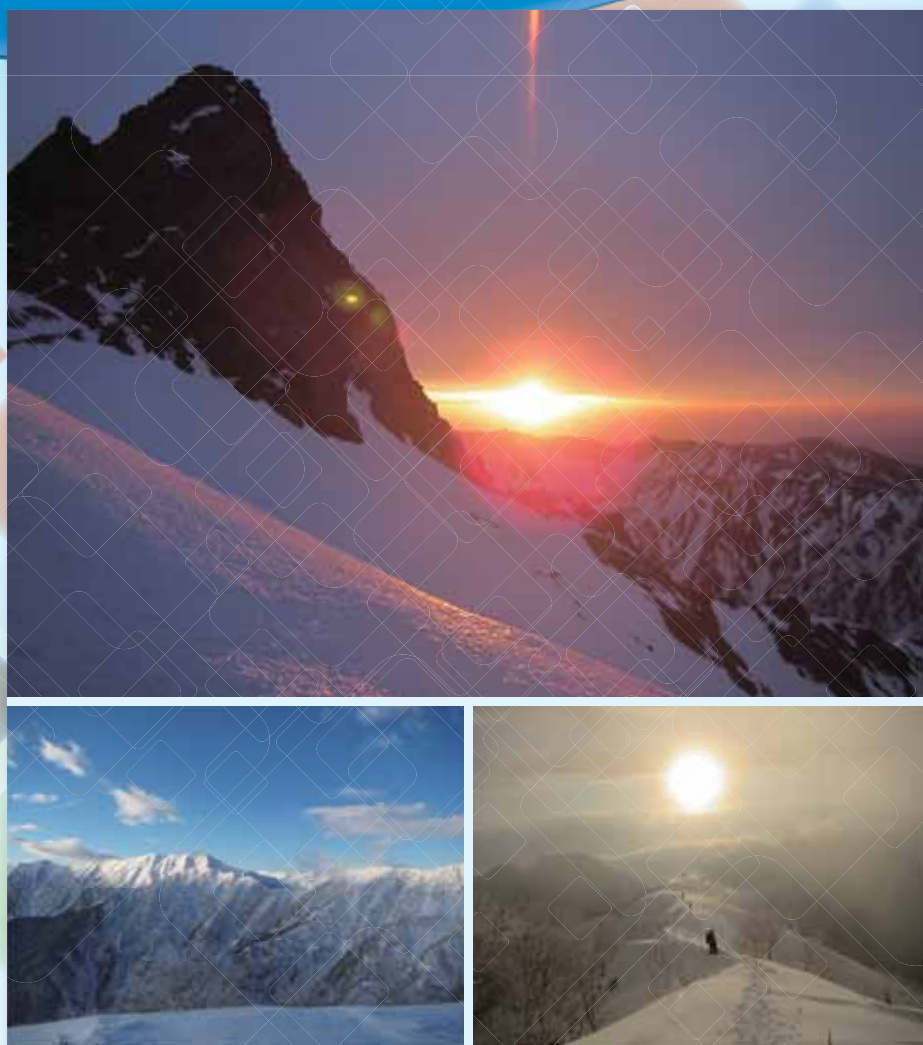


大阪作業療法 ジャーナル

Journal of the Osaka
Occupational Therapy Association : **JOOTA**

特集

〇〇療法の現在(いま)



Vol. 32 No. 2
Jan 2019

OT
SAKA

(一社)大阪府作業療法士会

大阪作業療法ジャーナル

第32巻 第2号

巻 頭 言	木瀬 憲司	75
特 集：〇〇療法の現在(いま)		
促通反復療法(川平法)の理論と実際	松下 太	76
練習量を確保するための家族参加型および病棟実施型の Constraint-induced movement therapy の実際	竹林 崇	82
慢性疼痛に対する認知行動療法 —作業療法への応用—	松原 貴子	88
精神疾患における認知機能障害と認知機能改善療法について	林 良太	96
知っていますか?		
子ども食堂と私たちの取り組み —子どもが紡ぐまち・まちづくり—	宮崎 宏興	103
認知症カフェ	田中 歩	109
書評カフェ	中西 英一・中西 一・中村めぐみ・塚越 千尋	116
となりの街の作業療法士		
回復期リハビリテーション病棟で行っている地域活動	櫛邊 康孝	120
中河内ブロックと私たちの成長記録 ～4年間の活動を通して～	浅田 健吾	124
研究論文		
急性期脳卒中患者の転帰時 FIM 排泄項目に影響する因子 第一報 —早期離床と転帰時 FIM 排泄動作項目および排泄管理項目との関連—	荒木 正人	129
実践報告		
Distraction 技能獲得により不安の軽減と自己効力感ならびに 社会生活活動の改善がみられた一例 —事例報告—	福原 啓太	135
短 報		
地域在住高齢者の健康なライフスタイル評価尺度 日本語版(HELP-J)作成の試み	中村めぐみ	143
投稿規定		151
執筆要領		153
投稿論文チェックシート		155
編集後記・部員名簿		156

表紙について



「人間形成のために登山をしよう」と作業療法士の養成校に入学が決まった時に思った。今となってはなぜそう思ったかは定かでなく、その当時読んでいた漫画か書籍の影響だったのかもしれない。入学すると運よく大学で登山部に在籍していた同級生(大学卒業後リハの養成校に入学)に出会い、それから約40年、主に北アルプスを登っている。当初は夏山のみであったが、今は春夏秋冬、一般の登山道から、岩場・ガレ場・雪道と自分の能力に相談しながら、楽しんでいる。表紙の写真はそんな登山道の一場面を切り取った風景である。重い荷物を背負い、急な坂道や土砂降りの雨、一歩踏み出すのも一苦勞の雪道、一日10時間以上歩かないとたどり着かない目的地などつらい事も多いが、少なくとも言える事は登山が私の人生を豊かにしている事は確かである。街では決して見れない驚愕の風景や出会えない動物、下山後のその土地の食べ物やお酒に巡り会える楽しみ。今の私にとって捨てることの出来ない時間と空間である。

巻 頭 言

対象者とかかわるという事

木瀬 憲司

ボバース記念病院

「生活行為向上マネジメント(以下、MTDLP)は、日本作業療法士協会が厚生労働省老人保健健康増進等事業において、作業療法を具体的にわかりやすく伝達する【作業療法の見える化ツール】として開発したものです」この文章をここ何年間でどれだけ話してきたであろうか?にもかかわらず最近では自分の中で「本当にこの説明でいいのだろうか?」という自問自答をしている。MTDLPは自分の評価、見方、見え方の偏りを「より可視化」することを可能とし、その人の「その人らしさ」・「その人の想い」を焦点化していく思考過程と思考過程を実現するためのプログラム立案のプロセスである。すなわち MTDLP はナラティブ・ベイスド・メディスン(NBM)とエビデンス・ベイスド・メディスン(EBM)による医学的な評価を含めた多面的な視点を示す事を可能とし、両者を結びつけるツールであると近年は考えるようになってきている。

生活行為に着目し「活動と参加」に資する専門職種である私たちは、アセスメントとプランを立案して「その人らしさ」の再構築を図っていく。そして、臨床推論を進めるために「姿勢コントロール」や「選択運動」といった潜在能力を評価し、「環境調整」「口頭指示」「徒手的な介入」を通じて運動分析を行い、これらを通じた仮説検証作業が運動の評価(効率性、質的、量的)につながり最適な活動と参加のベースとなっていく。最適な活動と参加は様々な生活行為向上につながる礎であることはいうまでもない。やはり「質的量的に高く効率の良い動き」を考えながら生活行為に着目し臨床を行っていく事は回復期あるいは発達領域において非常に重要なことであると思う。

今号は「活動と参加」に重要な方向性や思考過程を考える重要な機会を与えてくれる「〇〇療法」という特集である。近年の脳科学の進歩はさまざまな介入方法や治療法を進歩発展させ我々の運動分析や臨床推論を助けてくれている。それらはニューロリハビリテーションと称され、脳機能について注目したアプローチであり、作業療法士の中でもスタンダードとなってきた事はいうまでもない。今回は身障領域からは川平法、CI療法、認知行動療法、精神科領域からは認知機能改善療法といった代表的な介入のメソッドが報告されている。これらの方法は近年の学会においても科学的な根拠やデータも多く発表されており作業療法士の臨床現場での力強い後ろ盾となり多くの学ぶ機会を与えてくれている。

今回の原稿を執筆して下さった先生方の日ごろの臨床の視点や評価に触れることは、作業療法士のベースの引き上げになることは言うまでもない。しっかりと読破し、明日からの臨床の一助としていただけたらと思う。

特集：〇〇療法の現在(いま)

促通反復療法(川平法)の理論と実際

松下 太*

キーワード：促通反復療法、脳卒中、運動療法

要 旨

脳卒中片麻痺に対するリハビリテーションにおいて、より積極的に麻痺肢の機能回復を促進するアプローチとして数多くの訓練法が提唱され、その有用性が報告されつつある。促通反復療法(川平法)は、伸張反射や皮膚筋反射、あるいはクライアントの動かそうとする意志や麻痺肢への注視、治療者による口頭指示とのコンビネーションによって、クライアントの意図した運動をより容易に実現させ、それを集中的に反復する訓練である。今後、振動刺激や電気刺激、ボツリヌス療法、経頭蓋磁気刺激などの他の治療法との併用により、さらなる効果が期待されるリハビリテーションの一つの手段である。

【はじめに】

脳卒中片麻痺に対するリハビリテーション(以下リハ)において、これまで運動麻痺を回復させる手技として神経筋促通法が経験的に用いられてきたが、その有効性については明確ではなかった。近年、損傷を免れた神経細胞が、損傷された神経細胞の役割を代行する可塑性の存在が明らかにされ、その神経科学に基づいて、新たに開発された Constraint-induced movement therapy (CI療法)、電気刺激、反復経頭蓋磁気刺激、経頭蓋直流電気刺激、robotic therapyなどの治療法は、伝統的な治療法と比較して有効性が明確にされてきている¹⁾。

このように、より積極的に麻痺肢の機能回復を促進するアプローチとして数多くの訓練法が提唱され、その有用性が報告されつつある。前述した神経可塑性の発現は使用頻度依存であること²⁾、シナプスおよび神経路において興奮が伝導されて初めてその形成や伝達効率が強化されること³⁾が明らかとなっ

おり、脳卒中片麻痺に対するリハに必要なことは、訓練量の向上にあるといえる。そのためには、リハの診療時間内に訓練量を増やすことが求められる。しかし、近年の診療報酬体系の問題やマンパワー不足のために、訓練の量や時間を増やすことは容易ではない。現行の診療報酬体系の中で最大限の効果をj得るには、訓練の質と量の向上が重要課題となっている。

促通反復療法は、リハ科専門医である川平和美名誉教授(鹿児島大学)により考案された脳卒中片麻痺を改善させる運動療法である⁴⁾。脳卒中による片麻痺は大脳皮質運動野、あるいは、運動野から下降する神経線維の損傷が原因で生じる。病巣が神経の細胞体を損傷する大脳皮質であっても、軸索が走行する放線冠や内包にあっても、その回復には大脳皮質から脊髄前角細胞までの神経路の再建・強化が欠かせない。シナプス前細胞の興奮がシナプス後細胞に伝わることによって、シナプスの伝達効率が向上し、興奮伝達を繰り返すと、シナプスの組織的な結合強化が生じる(図1)。つまり、再建・強化したい神経路へ興奮を伝えることなしには、効率的な神経

まつした ふとし(作業療法士)

* 森ノ宮医療大学 保健医療学部 作業療法学科

大阪作業療法ジャーナル
第32巻 第2号

発行人：関本 充史

(一社)大阪府作業療法士会

〒540-0004 大阪市中央区玉造2-16-8 玉造井上ビル6階

TEL：06-6765-3375 FAX：06-6765-3376

URL：http://osaka-ot.jp E-mail：jimu@osaka-ot.jp

出 版：株式会社セカンド

〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F

TEL：096-382-7793 FAX：096-386-2025

